

1999年 社員旅行



デサント社長 小関 秀一
こせき しゅういち

私が香港駐在から上海に移駐したのは1999年だ。1997年の香港返還を現地体験し、その2年後に本格的な発展を迎えつつあった上海に赴任した。繊維事業の中国における責任者として大きな期待を胸に乗り込んだ。しかし、その実力は香港とは比べようもなく、スタッフの仕事ぶりも古い中国体質のままのスローなペースで面食らった。

最初は40名程度の所帯だったが、私が上海を去る時点の2005年には400名にまでなっていた。まさに、中国・上海が急激に変わる潮目の時であったといえる。この間に対応はもとより対欧米向けの繊維製品輸出が格段に伸びた。

毎日がものすごいスピードで変化していく日々だったが、そうした中で最初に起きた私にとって最も印象深い出来事が、赴任した年の秋に行った海南島社員旅行だ。

事の発端は私が上海に赴任した直後の歓迎宴でしたたかに酔わされ、現地社員から会社で順調にいったら社員旅行をぜひ実行してください、というメモを渡され、その場でそれにサインしてしまったことだ。

現地法人として独立採算化したばかりであるにもかかわらず、業績が順調だったこともあり、全社員による社員旅行の決行となった。日本では社員旅行なるものが風化していた時

だが、中国ではまだまだ一般的ではなく、あっても近場への日帰り旅行が普通であった。そんな時代に社員からの提案で、飛行機で2時間もかかる観光地として脚光を浴び出したばかりの東洋のハワイ(?)の海南島へ旅行をすることになった。私も40代半ばと若かったこともあり即決した。

せっかく行くのだからと、いつも出張では安宿で経費を節約していた社員に、たまには欧米人が宿泊するような5つ星ホテルに泊まって彼らの感覚を実体験しようという提案し、一流ホテルに宿泊した。朝の豪華なビュッフェに驚き、ホテルの敷地内にあるプールでくつろいだりと、当時の中国ではなかなか味わえない経験をした。

旅行中の体験ももちろんのことだが、さらに強く印象として残っているのは、その後の社員の奮闘ぶりだ。これには驚くばかりで、初年度の実績として予算の3倍の利益をもたらしてくれた。経営者として、社員が上げた成果に報いることの大切さを実感した出来事だった。

海南島は今や中国最大のリゾート地として大いに栄えているようだが、海南島と聞くとびに当時参加したスタッフの顔と、一緒に泳いだプールを思い出す。